

Title	批判的社会言語学とウェルフェア・リングイステイクスの接点：あらたな批判的社会言語学の可能性について
Author(s)	山下, 仁
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97361
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

批判的社会言語学とウェルフェア・リングイスティクスの接点 — あらたな批判的社会言語学の可能性について —

山下 仁

1. はじめに

本稿は、批判的社会言語学とウェルフェア・リングイスティクスの接点について考察することを目的とする。まず批判的社会言語学を概観し、次に批判的社会言語学に属すると考えられる Siegfried Jäger の批判的談話研究の特徴を確認する。さらにウェルフェア・リングイスティクスの課題のいくつかを挙げ、最後に批判的社会言語学とウェルフェア・リングイスティクスの接点とこれらの学問分野の可能性について考える。

2. 批判的社会言語学について

批判的社会言語学について、筆者は 2003 年に「現時点では、批判的社会言語学という用語は定着しておらず、それがどんな学問分野であるかも明確でないので、ここでそれを説明しようと思う」と述べ、日本語の文献をもとに、「批判的社会言語学とは「自由な精神」と「何はばかるとのこない批判精神」によって「現実と四つに組んだ独創的な研究」を行おうとする学問分野とすることができるだろう」（山下 2003）と記した。その後、2022 年に Jürgen Spitzmüller の *Soziolinguistik: Eine Einführung* という本が出版され、批判的社会言語学がメタ語用論的社会言語学とともに取り上げられていた。そこにはブルデューやフーコーの理論を援用した批判的社会言語学が今世紀になって次第に注目されつつあると記されていた。すでにこの本の書評を書いたことがあるため、以下ではまず、その書評も踏まえつつ Spitzmüller の社会言語学の教科書に記された批判的社会言語学がどのようなものであったかを確認しておきたい（山下 2023）。

Spitzmüller の *Soziolinguistik* 全体をまとめると、1 章の導入ののち、2 章では構造理論、行動理論、構築理論といった社会学の理論が、社会をどのようにとらえているかが論じられる。3 章では「言語変異」や「言語変種」といった社会言語学上の概念が解説され、4 章では社会言語学の歴史が記される。5 章と 6 章と 7 章では、2 章でとりあげられた構造理論、行動理論、構築理論という社会学の理論に対応する社会言語学の分野として、言語が社会の一部を反映していることを明らかにしようとした変異言語学（5 章）、言語が社会を形成していることを明らかにした相互行為の社会言語学（6 章）、そして言語が社会を反映することもあれば、形成することもあることを示した批判的社会言語学及びメタ語用論的社会言語学（7 章）の説明がな

されており、最後に8章でもう一度社会言語学とは何かについて考察されている (Spitzmüller 2022)。以下では、7章で批判的社会言語学について、どのような説明がなされているかをやや詳しく見てみる。

2. 1 批判的社会言語学の問題意識について

メタ語用論とは、ある言語使用に対する評価やイデオロギーを研究する学問分野であり、言語使用に対する評価を社会における力関係や不平等のコンテキストの中で考察するのが批判的社会言語学である、という説明がなされる。批判的社会言語学の中心的な概念は権力、イデオロギー、そしてヘゲモニーであり、言語学に内在する言語イデオロギーや社会的不平等についても反省し、批判的にとりあつかうのが批判的社会言語学であるという (同, 222)。

言語使用の違いが社会に差異をもたらし、社会的不平等をももたらすという問題意識が批判的社会学の共通認識である (同, 223)。とすれば、国際語となった英語の母語話者と非母語話者の言語使用の違いがたんに言語使用というレベルの差異にとどまらず、社会的な差異、ひいては社会的な不平等をもたらしているというかどやひでのりの議論などは批判的社会言語学のテーマと言える (かどや 2023)。ここでは「言語使用の違い」が問題になっているが、言語を使用するのが人間であり、その使用の違いによって社会的な不平等を被るのも人間である、ということ忘れてはならないだろう。

すべての言語や言語変種は原則として同等である、という考え方に批判的社会言語学は異を唱える。理論的には同等でも、人々がその言語使用によって不平等に扱われている事実を否定することはできないからである。この不平等との関連で言語使用における価値の問題をとりあげたのはピエール・ブルデューであった。ブルデューの基本的な考え方のひとつに「社会資本」がある。ある社会において価値があると考えられている言語の使用はその社会における成功につながるため、その言語を教えることがビジネスになる。ビジネス英語、ドイツの移民にとってのドイツ語、日本の外国人労働者にとっての日本語などがその一例である。このような現象をとりあつかうのが批判的社会言語学である (Spitzmüller 2022, 224 : 以上が 7.1 節のまとめ)。

2. 2 批判的社会言語学の認識論的・理論的背景について

批判的社会言語学の認識論的・理論的背景のうち関与性のある理論として Spitzmüller が挙げているのは、ブルデューの社会学、ポストマルクス主義、フーコーの哲学、ポストコロニアル理論、そして批判的談話研究 (以下、CDS と記す) である (同, 225f.)。

パトリック・ハインリッヒはウェルフフェア・リングイスティクスにとってもブルデューの考え方が重要であると指摘している (ハインリッヒ 2021, 24f. 参照) が、ブルデューの社会学の中で批判的社会言語学にとって重要となる概念は「ハビトゥス」である。たとえば階級に結びついた行動様式としてのハビトゥスは、社会化によって受け継がれる。同じハビトゥスをもっている人は、そのハビトゥスをもっていない人たちをすぐに認識することができる。言語使用は、その意味でハビトゥスの一部である。そのように考えるならば、社会的不平等は単に構造的に

存在するだけでなく、社会的行為によって作られるものなのである（同, 226f.）。

他方、カール・マンハイムのようなポストマルクス主義の思想家たちは、イデオロギーを「ある集団の世界観の総体」と理解する。とすれば、イデオロギーにとらわれない立場というものはない。イデオロギーはブルデューのいうハビトゥスと同じく、静的な構造ではなく社会的行為によって作られるものなのである。イデオロギーは記号（言語）の使用によって生産される。すべての言語使用はイデオロギーと結びついており、批判的社会言語学は、この広い意味でのイデオロギー、そしてヘゲモニーを問題にする学問分野である。（同, 228-231）。

ポスト構造主義の代表的な研究者はフーコーであり、その中心概念は「言説・談話（ディスクール）」である。フーコーによれば、何がどのように言われるかは偶然ではなく、談話にはなんらかの規則がある。談話と同様に重要な概念が「知」である。知は人間が世界をどのように認知するかを規定し、人間が世界でどのように行為するかを規定する。知は社会において誰が発言することができ、誰が権力を持っているのかを規定し、人間が自分自身や他者を、主体性をもつものとして認知することを規定する。後にとりあげるデュースブルク学派の CDS はフーコーの知、権力、批判そして主体化の概念に大きな影響を受けている（同, 231-233）。

ポストコロニアル理論としてはサイドの『オリエンタリズム』が挙げられる。批判的社会言語学にとってポストコロニアル理論が認識論的に重要なのは以下の点である。1. 言語と結びついた社会的不平等の要因が議論されており、その議論はかつての植民地ばかりでなく現代の他の社会でも重要な意味をもつ。2. これまでの社会言語学が主としてヨーロッパと北アメリカの理論や概念に基づいていたのに対して、それらとは別のパースペクティブを提供した。3. 社会言語学自体が植民地主義と結びついた伝統の上に立っているため、社会言語学自身を反省するという意味で重要である（同, 233f.）。

批判的社会言語学の認識論的・理論的背景として最後にとりあげられているのが CDS である。CDS は 1970 年代に英国で批判的言語学としてはじまり、1980 年中旬から批判的談話分析（以下、CDA と記す）として発展した。その後英国だけでなくオランダ、ドイツ、オーストリアでもこの研究が推進され、1990 年頃に研究者同士の協力体制が作られた。最近ではヴァン・ダイクの提案により CDS と呼ばれている。その特徴はあえて客観的で記述的であろうとはせず、政治的な立場を表明し、しかもそれを誇りに思っている点にある。1990 年頃から雑誌 *Discourse and Society*、*Discourse Studies* などが出版され、2020 年代には言語学の中でも重要な地位を占めるようになっていく（同, 235f. : 以上が 7.2 節のまとめ）。

2. 3 批判的社会言語学の作業仮説と方法論について

批判的社会言語学の第一の作業仮説は、ことばが違いを生み出すというものである。ことばは人々を結び付けるばかりではなく、人々を切り離す。ことばが違いを生み出すということは、社会的に言えば社会的な不平等を作り出す、ということである（同, 236）。

言語は非均質的なものであるというのが社会言語学の基本的な立場であるが、「言語」はしばしば「標準変種」として理解される。この考え方によるとアフリカの多くの言語は標準変種で

はないので「言語」とはみなされない。つまり、言語はイデオロギーの産物である、というのが第二の作業仮説である。イデオロギーの産物であるため解釈可能であり、社会的に影響をもつ。マイケル・シルヴァスティンによれば、言語がイデオロギーの産物であるということ抜きにして、言語を理解することはできない。とすれば、言語学が対象とするべきは言語体系だけでなく、言語使用とその背後にある言語イデオロギーも含まれ、それらがどのように結びついているかを明らかにすることが言語学の課題なのである（同, 238f.）。

第三の作業仮説は、批判的社会言語学が言語学者や言語学の社会的な役割を研究対象にするというものである。研究者が中立的だと思っていたとしても、中立的な研究というものはない。言語学の研究にもバイアスがある。客観的真実を求めているも、社会の参与者として研究をしている。学問そのものも、それぞれの学問分野も社会のプロセスによって作られた結果である。学問には資金が必要であり、その資金は国家や基金から支出されている。つまり、それぞれの社会で、研究の意義が認められている研究がなされているのである（同, 239-241）。

第四の作業仮説は、社会は常に変化しているというものである。2020年代でいえばグローバル化がある。メディアと経済のネット化、もしくは移動の可能性の拡大により、観光、移民、あるいは戦争・紛争などからの亡命者、難民などの存在が研究の対象になる。たとえば、移動によって彼ら・彼女らの言語資源（母語）の価値が失われ、新たな言語資源（移動先の言語）を獲得しなければならない場合、移動先の社会で彼ら・彼女らが受け入れられるのか、あるいは抑圧を受け、排除されてしまうのか、そして、それぞれの社会でどのような多様性が求められるのかなどが問題になる。それらとの関連で、現在メトロリンガリズム、トランス・ランゲージングといった研究分野が存在する（同, 241-244：以上が 7.3 節）。

作業仮説の次に、批判的社会言語学の方法論の説明がなされる（7.4 節）。

ことばと社会は相互に条件づけあい、相互に影響を及ぼすという考え方によって、批判的、メタ語用論的社会言語学は、方法論的に中間の立場をとる。つまり社会構造が行為を条件づけているという立場と、行為が社会的空間を作り上げているという立場の中間である。社会の参与者は、言語行為をおこなう際には社会的条件によって制限を受けているが、同時にそのコミュニケーション行為によって社会を作り上げているものとする（同, 245）。

方法論としては、批判的社会言語学者たちは個人による個々のローカルな行動と社会的な構造との間に明確な境界線はなく、連続的な多くの移行段階があるとする。たとえば社会にとっての「典型」や「普遍」とされているものも段階的なものであり、その段階を尺度化する場合、その尺度もあらかじめ存在しているとするのではなく、コミュニケーションやコンテクストに依存して作られるものとする（同, 245f.）。

方法論との関係で重要なのは、研究者自身も研究の対象になるという点である。批判的社会言語学の方法論においては反省性の役割が強い。研究のプロセスや研究者自身も、体系的に研究・分析の対象にするため、自己分析をおこなうこともある。さらに、フーコーの理論による談話分析も批判的社会言語学の方法として採用される（同, 246-249：以上が 7.4 節）。

2. 4 批判的社会言語学の中心的な概念について

Spitzmüller の *Soziolinguistik* の 7.5 節で批判的、メタ語用論的社会言語学の中心的な概念としてとりあげられているのは、権力、ヘゲモニー、そして社会的不平等である。

権力に関して特に重要なのはフーコーの権力概念である。フーコーによれば権力とは、ある社会における複合的で戦略的な状況に与えられる名称であり、知と結びついているものである。権力は言語使用の中に表われているだけでなく、言語使用によって権力が作られ、強化される。そのような権力は、何が「正しい」のか、何が「ふさわしい」のかという言語使用に関する討論会などで顕在化する（同, 250-252）。

社会的不平等に関しては、移民が声を失っていることを問題にしたブロマートの研究が紹介される。ブロマートは、タンザニアからベルギーに移った中産階級の人が習得した英語を彼ら・彼女らが使用したとしても、それは無教養の証と評価される可能性が強いという（同, 254）。

批判的社会言語学の批判とは、元来はギリシャ語で「分ける」、「区別する」、「決める」という意味の *krinen* であり、区別の方法で、分析と似た概念であった。それがカントらによって精密化されたが、批判的社会言語学の批判は、カントの批判概念ではなく、むしろフーコーの批判概念と結びついているという。フーコーにとって、批判の目的は評価であり、かならずしも低く評価することだけではない。バトラーによれば、批判とはある対象物が良いとか悪い、高いとか低いということの評価することではなく、その評価の体系自体を批判することだという。それは日常生活における自明性を疑うということでもある。というのも、自明性の中には、権力やヘゲモニー、もしくはなんらかの力が内在しているからである（同, 255-258）。

本書には、変異言語学、相互行為の社会言語学と同様、批判的、メタ語用論的社会言語学についても具体的な研究例が紹介されているが、それらについては割愛する。

3. Siegfried Jäger の CDS について

以上が、Spitzmüller の *Soziolinguistik* における批判的社会言語学に関する記述のまとめである。上記のまとめから、Spitzmüller が社会言語学の一部である批判的社会言語学を、社会学や哲学などの理論的枠組みとの関連で説明しており、とくにフランスの哲学者であるミシェル・フーコーの影響が大きかったことが読み取れたに違いない。そのフーコーの理論を取り入れて CDS をおこなったのが Siegfried Jäger である。本稿では批判的社会言語学とウェルフェア・リングイスティクスの関連を明らかにするため、ごく簡単に Jäger の CDS のエッセンスについて触れておきたい。以下では、特に Jäger の言語学的な観点に焦点を定めることにする。

3. 1 Jäger にとってのテキスト概念について

Siegfried Jäger の言語学的な観点を考察するにあたり、まずは、Jäger 自身がテキストをどのように定義しているかを確認することにしたい。Jäger によると、テキストとは、以下に記すようなものである。

- 多かれ少なかれ複雑な個人の活動、もしくは多かれ少なかれ複雑な個人の思考プロセスの結果を言語化したものであり、
- 他者に、もしくは（将来の）自分自身にその内容を伝える（コミュニケーションをする）目的で作成される。
- テキストを生み出すもう一つの前提条件は、知（世界知、知の地平）の存在である。知は、学習プロセスによってもたらされ、それは、人が学びつつ、既存の社会における談話の中に巻き込まれながら、ある歴史的時点で終了し、あるいはこれから終了するプロセスである。
- さらに、その知を用いることのできる人間は、ある具体的な状況で、必要に応じて、
- その結果、ある動機をもちながら、
- その知をある特定の作用（意図）、およびある目的をもって、思考によって練り上げ、さらに発展させる。
- その際、通常、他者による受容の条件などを考慮し、ある特定の関連性をもった言語的／概念的行為や活動、もしくはテーマを構築するために必要な、ある種の伝統的な（慣習化された、通常は無意識的／ルーティン化された）言語的／概念的手段（すなわち道具や操作としての統語論、文法、語用論、語彙）の助けを借りて、それらの活動の結果として、また、それと同時にある特定の活動の目標に従って、文章や口頭のテキストを作成するのである。

(Jäger 2001, 118f.)

このテキストの定義にはロシアの心理学者である A.N.レオンチェフの活動理論の基本的な考え方が含まれている。つまり、Jäger の CDS にはフォーコーの理論だけではなく、ロシアのヴィゴツキー学派の影響が色濃く含まれている。とはいえ、Jäger はレオンチェフの活動理論をそのまま受け入れているわけではない。別の箇所でも、Jäger は次のように述べている。

A.N.レオンチェフのように、語を「道具」として定義すること、つまり「操作できるもの (Operationalisierung)」と定義することは非常に重要である。しかし、すでに述べたように、いわゆる客観的な意味だけを言語学の真の対象としてとらえ、「主観的な意味」を心理学の対象とすることには問題があると思う。レオンチェフは、フェルディナン・ド・ソシュールの伝統にしたがい、言語学の自律性を重視する姿勢を踏襲している。ソシュールは「言語の外部にあるもの」をすべて排除し、システムとしての言語に集中しようとした。(同, 113)

この批判をもとに、つまりフェルディナン・ド・ソシュールの伝統にしたがってシステムとしての言語に集中するのではなく、それまで排除されてきた「言語の外部にあるもの」を取り込むため、Jäger は自分自身の CDS において、それまでの言語学にはない、「談話の束」や「談話の断片」といった、独自の概念を導入しそれらを使用している。そこで、次にそれらの概念に関する説明を取り上げる。

3. 2 Jäger 独自の概念について

既述のように、言語研究に限らず、研究というものは多かれ少なかれその時代の要請に依存している。しかし、Siegfried Jäger は、1980 年代頃の時代の要請とでもいえる、言語研究に求められていた「客観主義」を問題視した。つまり、上記の「ソシユールの伝統にしたがい、言語学の自律性を重視する姿勢」である。Jäger はソシユールの伝統に対し、言語学は、談話における言語学上の発話と、その発話が参照する現実、と同時にその発話から派生する現実との関係をも、研究の対象にする権利を留保するべきであると主張する。つまり、テキストが、あらゆる種類の社会的内容を伝達するもので、社会的過程に言及するものでもあり、その過程に影響を与え、社会の変化や安定に寄与する談話の断片として理解する権利を留保するべきであると述べる (同, 15)。言語学が、テキストの表面的な構造だけでなく、伝達内容の側面をもとらえていくべきであると考えた。そのような態度の背後には、マルクスが「フォイエルバッハに関するテーゼ」で主張したように、理論ではなく実践が重要であるというマルクス主義の認識がある (山下 2023, 15 参照)。

Jäger は、マルクス主義の認識を受け継ぐレオンチェフの活動理論について次のように説明している。なお、本稿では紙数の関係で Jäger が用いた図は省略する (Jäger 2001, 114)。

人間は、互いに協力しあい、互いに感じあい、互いに経験する。つまり人間はコミュニケーションをする社会的な存在である。人間が活動をする際には、なんらかの動機がある。その動機は、なんらかの欲求によってもたらされるものであり、その欲求を満たすためには、ある特定の目標を設定しなければならない。設定した目標に到達するためには計画を立てなければならない。その計画を実行するためには、なんらかの道具を使用することが必要となる。その活動が家を建てるといった具体的な活動であれば、そこにはさまざまな行為が含まれる。たとえば、木材を切るとか石を運ぶなどである。このような具体的な活動を踏まえて知的な活動について考えてみると、その必要性、動機、道具、達成すべき目標は知的なものであり、その形式は人々が一般的に合意したもの、つまり慣習化されたものであることがわかる (同, 115f 参照)。

社会の本来の姿の中に、人の活動と動物の行動の違いが示される。つまり人間はことばを使用して相互行為をしながら社会を発展させる。つまり、長い時間をかけて社会が発展した場合にのみ、テキストについて語るができるのである。そのように考えると、テキストとは個人的なものではあるが、それと同時に社会的・歴史的に形成されたものでもある。

言い換えるならば、それら (テキスト: 山下) は (個人的なものを越えた) 社会的・歴史的な談話の断片であり、あるいはその断片を含んだものである。私はこれらの要素を談話の断片と呼ぶ。それらは、談話の束 (同じトピックを持つ談話の断片のまとまり) の構成要素、あるいは断片であり、異なる談話のレベル (それは、学問、政治、メディア、日常生活など、そこで人々が語る場所のことである) を移動する。そして、全体として社会の談話全体を構成する。(同, 117)

Jäger が、「談話の断片」や「談話の束」という独特な用語を用いるのは、それらが人間の相互行動や活動の結果としての談話全体、すなわち人間の社会における談話全体の一部としての談話を、表面的な構造だけではなく、内容面も含めたものとして捉えているからなのである。それは、ある談話に参与した人間の活動の結果として捉えられる談話が、他の人間にも使われるという事実を出発点とし、そのようにして相互コミュニケーションがなされ、そのコミュニケーションにおいてことばが道具として用いられると考えることなのである。いかなる思想家も、他者とのコミュニケーションなしに、自分だけで自分の思想を作りあげることにはできない。また、そのように談話を捉えることで、人間の活動としてのイデオロギーや権力関係などがその談話に含まれると考え、研究者もその談話に加わることで、問題の解決になんらかの貢献をすることができるとも考えているのである。別の箇所では Jäger は次のように語っている。

一般的に学問は、真理と知識を生み出すという目標を追求するものである。基礎研究としてであれ、応用の前提条件としてであれ、あるいは自然科学、社会科学、もしくは文化化学的な分析としてであれ、学問によって生み出された真理と知識は、現実とより適切に関わり、現実を改善し、現実をより良くするために使われるものなのである。その意味で、学問は原則として、あらゆる種類の既存の知識に対して批判的である。というのも既存の知識に疑問を投げかける可能性があるからだ。(同, 215)

Jäger は、上記の引用部分で、学問が既存の社会や現実の問題解決になんらかの貢献をすべきものであるという立場を明確に記述している。確かに、既存の権力構造を批判せず、既存の社会を支配する権力者の側にたち、既存の社会秩序を守ることが学問の使命と考え、権力者におもねる無批判な研究者が存在することも確かである。だが、Jäger はそのような立場はとらない。この Jäger の立場は、他の CDS の中心的な研究者にも共通する立場である。上の引用の後で、「批判」についても詳しく説明しているが、ここではそれらについても割愛せざるを得ない。とはいえ、現実を批判し、現実をより良くしようとする立場は、ウェルフェア・リングイステイクスに通底する部分であろう。そこで、次にこのウェルフェア・リングイステイクスの問題を取り上げる。

4. ウェルフェア・リングイステイクスについて

ウェルフェア・リングイステイクスは、1999年にネウストプニーとの対談において徳川宗賢によって提唱された概念であり、「福祉言語学」「厚生言語学」とも呼ばれている。筆者も2011年に「談話分析」の枠組みにおいて、CDAとウェルフェア・リングイステイクスの関係に触れたことがある(山下 2011)。その後2013年には社会言語科学会でウェルフェア・リングイステイクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」という特集が生まれ(村田他 2013)、2016年にも「ウェルフェア・リングイステイクスと調査研究—現場性・実践性という観点から—」というワークショップがなされ、その意義などについて検討が重ねられた(野山他 2016)。

さらに、2023年には『ともに生きるために—ウェルフェア・リングイステイクスと生態学の視点からみることばの教育』が出版され、社会言語学分野では2024年現在、25年前に提唱されたこの概念がリバイバルしているように思える（尾辻他 2023）。

ウェルフェア・リングイステイクスという概念を導入する理由として、徳川は「言語学者も…略…社会に貢献することも考えるべきではあるまいか。そしてこれまでの研究成果をどのように社会に役立てるか、足りないところはどこなのか、そういうことを考える時期になっていると考えた」（徳川 1999, 90）と述べている。Jäger同様、言語学も社会に貢献するべきであるという考えがその根底にあった。CDAとウェルフェア・リングイステイクス（以下、WLと記す）との関係について、2011年に筆者は次のように記していた。「WLが従事すべき具体的なポイントとして徳川が取り上げたのは、「言語障害」、「小言語問題」、「方言」、「アイデンティティ」、「老人語」、「差別・女性語」、「言語教育」、「表記」、「情報機器」、「情報選択」、「言語管理」などの問題である。「福祉」という観点から言語の問題をとらえるということは、言語の「情報伝達の問題だけでなく、人間の問題」を考えることになる。その姿勢はCDAばかりではなく、最近の社会言語学の問題意識とも結びつく。ヨーロッパにおけるCDAのもっとも基本的なテーマである「差別」の問題がWLの問題として取り上げられていたという事実も、両者の関連性を示すものであって、たんなる偶然とは思えない」（山下 2011, 155）。この時には、その問題を指摘しただけであったため、以下ではそれぞれの問題について、それらがどういう問題であったのかを確認する。

4.1 WLの観点からの言語の問題

「言語障害」に関する問題として挙げられているのは、「耳の聞こえない人のこと」であり、「手話の世界」の問題が言及されている。徳川は、「日本手話は、あれは日本語ではない特別な言語です」（徳川 1999, 91）と、言語のひとつとして「日本手話」をとらえていた。だが、「日本語対应手話」と「日本手話」のうちどちらが便利かという問いに関して「日本語に親しんだ方が便利だと思う」という見解を示していた。現時点では、これに異を唱える研究者も多いのではないと思われる。また、その当時は「そういう問題を一生かけて研究する人」がいなかったため、そういう人がいてもいいと思うと述べているが（同上）、現時点では「手話」の問題を、おそらく一生かけて研究しようとしている社会言語学者も存在すると思われるため、それらの個別の発言には首肯できない部分もある。とはいえ、手話の問題がWLの取り組むべき課題のひとつであり、「文学部の中にある言語学だけではWLは成り立たないことを示していますね。旧来のディシプリンでは対応しきれない。つまり言語学のパラダイムが変わらざるを得ないということを直接的に示している」（同上）という発言は、極めて重要であろう。言語学のパラダイムが変わらざるを得ない、ということ指摘していた点でもSiegfried JägerのCDSと通底するところが認められるからである。

「小言語問題」としては「地球上で絶滅寸前の小言語」の「使用者をどう扱っていけばいい

のか、小言語を保持していくのがいいのか、それとも、効率のいい言語に乗り換えたほうがいいのか」(同,92)という、現時点でも簡単に解答を出すことのできない問題が指摘されている。また、世界においては「大言語」といえる日本語に関しても、「外交用語」や「学術論文を発表するときに日本語で発表できるかできないか、というようなことを考えると、絶滅寸前の小言語とは違うかもしれないけれど、通ずる面はあるんじゃないでしょうか」(同,92f.)と、世界における言語の地位というマクロ社会言語学の問題も指摘されている。とはいえ、ここではニュースプニーにより日本語の地位が、「ドイツ語やフランス語と同じような立場」(同,93)にあることが確認されるにとどまる。この小言語との関連で次に議論されるのが「方言」の問題である。1999年の段階で徳川は、「私が若い頃と今とでは方言に対する見方は非常に変わってきていますね。以前は方言は罪悪、下劣なものとしてきましたが、現在は違う」(同上)と述べ、現在では「方言は個人的な特色を示すものである、そして親しみやすいものだという考え方が出てきた」(同上)と指摘している。さらに「放送で方言を使うかどうかというのは、これはどのように関係してくるのでしょうか」(同上)というニュースプニーの問いに対して、「方言を一段下の物と見ないということにつながるとすれば、関係があると思いますね。足の不自由な人が出て歩けるようにするために、歩道の段差を無くすというのに似ている」(同上)と述べ、「放送で方言を使うというのは、どうぞ街へ出て下さいということと関係がありはしないかという気がします」(同上)と説明する。耳が聞こえない、あるいは目が見えないといった人に対する情報の保障について考えるときに、個人に障害があるため情報が行き届かないのではなく、社会に障害があるためその人たちに情報が行き届かないのだ、というリテラシーの議論とも通じると思うが、徳川自身、方言には足の不自由な人がもつ障害とおなじような障害があると感じているということも否めない。もちろん、その「障害」を取り除こうとするのがWLであるという趣旨は理解できるのだが、「障害」を取り除くことだけがWLの課題なのか、という問題は考えてみるべき部分があると思う。これについては後にまた取り上げることにしたい。

次に示されているのは「アイデンティティ」の問題である。「今までの手話にしても少数言語にしても方言にしても、それを使うことが、あるいは使わないことが、その人のアイデンティティと非常に密接に結びついている」(同上)と述べられている。そこでニュースプニーが確認するのは「言語問題はただコミュニケーションの問題ではないということがはっきりしてくると思う」(同上)という点である。「つまり国家がどのようにアイデンティティを取り扱うかということじゃなくて、個人としてアイデンティティの問題を感じているから、そこからWLでなんとかしなければいけない」(同,94)という問題提起がなされる。ところがその後、徳川は「クルド人の問題」に触れ、「トルコ政府は「え？クルド族なんか、国の中にいませんよ」と言っているそうではありませんか」(同上)という事実を指摘する。アイデンティティの問題がコミュニケーションの問題ではなく、「国家」と「民族」の関係に深く結びついており、それが「アイヌのこととか、在日のこととか、あるいはニューカマーのこととか」(同,

95) と関連することが確認されている。つまり、ある社会における言語に関係するアイデンティティの問題は、その社会における偏見や差別の問題に隣接していると言えるだろう。

当時の彼らのアイデンティティと関係するのが「老人語」の問題である。徳川は「実は私が老人になってきたために、WL を言い出した面がありますね（笑）。遺言的雰囲気があります（笑）」（同上）と冗談めいたことを言いながら、若い人に通じない昔の単語を使う老人、歯の具合が悪くなって、発音もおかしくなる老人、繰り返し同じことを言う老人のことなどにふれつつ、「高齢化社会とされているのに、従来の言語研究では言語習得の研究はたくさんあるのに、言語崩壊の研究はほとんどありませんね」（同上）とまとめている。それに加えて「老人の行動が否定的に評価される」と同時に、「老人が若い人たちの行動を否定的に評価する」というミクロの、評価の問題があることも確認されている。若者言葉に対応する老人語が WL の対象であり、そこにはその言語変種に対する評価の問題が含まれる、という点が興味深い。

さらに、老人に対する否定的な評価とも関係する「差別、女性語」の問題が取り上げられる。ここでは「いわゆる「つんぼ」とか「女のくせに」などのいわゆる差別語のことだけ」（同上）ではなく「職業差別とか、社会的な地位の問題」「医療におけるインフォームド・コンセントの問題とか、官庁の情報公開の問題」（同,96）が指摘されており、現時点では一般的になった用語を使うのであれば、社会における言語権の問題、あるいは情報保障の問題全般に関する問題が指摘されている。

その次に「言語教育」の問題が取り上げられている。この問題に関しては、上記のように平高史也が言語教育を、日本語教育、母語・継承語教育、国語教育、外国語教育の四つに分けて詳しく論じているが（平高 2013）、徳川とネウストプニーが対談をおこなった時には大まかに「コミュニケーション・ギャップを埋めていく」外国語教育の問題、「社会言語能力とか社会文化能力」といった「異文化間教育」の問題、そして国語教育を必要としている人の範囲の問題について、それがアイデンティティとも言語障害の人たちとも、国内に住んでいる少数民族の問題とも関係することが指摘される（徳川 1999,96 参照）。さらに「表記」の問題で指摘されているのは、「文法能力の1つ代表的な問題として、現在も残っている...略...非常に大事な課題」（同,97）であり、その表記がどれだけ受容されているのかという問題である。具体的には、一般の人が「スポーツ新聞」などに書かれていることをどれだけ受け取っているのか、ということであり、「俗説では日本の場合リテラシー（読み書き能力）は99.9%ということになっているけれど、実際には色々な問題がある」（同上）ということである。

最後に WL の問題として取り上げられているのは「情報機器」と「情報選択」の問題である。どちらも「情報」に関する問題であるが、「情報機器」の問題として「たとえば情報機器に接近できる人と出来ない人との間に、現に差が出てきている」（同,98）という問題が指摘されている。それを「筆と硯の時代に字の上手な人と下手な人が出てしまうのと似ている」という例を挙げ、それとの類推から徳川が「現代的無筆が生まれている、と言えるかもしれません」（同上）と述べている。この当時には AI どころか、スマートフォンもなかったが、AI の時代にあ

っても、それに接近できる人とできない人がおり、問題の本質は変わらないのかもしれない。これに対して「情報選択」で問題になるのは「情報の洪水」という問題であり、そんな状況では「何を選んだらいいのか」というあたり、それが非常に難しくなっている」（同上）という問題が提起されている。さらに情報に関連して犯罪の問題やプライバシーの問題も指摘されている。

4. 2 ウェルフェア・リングイステイクスと批判的社会言語学の接点について

パトリック・ハインリッヒは、WL とは何か、という問いに「強者（支配的な話者）が彼らの優勢を再生産することをやめさせるアプローチ」であり、「言語を教えることを通して社会の変革に取り組むアプローチとも言えるだろう」（ハインリッヒ 2021, 34）と答えているが、上記の記述から、WL と批判的社会言語学、とくに Jäger の批判的談話研究との接点は、まさに言語に関する社会的な問題をなんらかの形で解決しようとする姿勢にあると思われる。

この両者の学問分野の可能性について考えるため、もう一度上記の記述を反省してみると、WL の課題として、徳川宗賢は解決すべきさまざまな言語上の問題を挙げてはいるが、批判的社会言語学の記述にあったような理論的背景や方法論に関する議論はあまりなされていない。まさに、ハインリッヒが言うように「理論的および方法論的な観点から考えると、WL は、ほとんど発展していない」（同上, 14f.）と言えるのかもしれない。ハインリッヒは、「日本の社会言語学では方法論に焦点が当てられることが多く理論化にあまり注意を払ってこなかった」と述べ、理論化の試みをしている。もちろん、そこで展開されたような経済の理論を援用した理論化は非常に有益であり、今後の議論にとっても参考になると思われるが、それによってすべての理論化がなされたかという点、そうではないようにも思われる。

ここでもう一度、WL という名称に立ち戻り、社会のウェルフェアとは何か、個人の幸せとは何か、ということを考えてみたい。言うまでもなく、社会にはさまざまなレベルで、またさまざまな条件により、あるいはさまざまなグループのなかに、マジョリティとマイノリティ、もしくは「強者」と「弱者」、すなわち支配的な話者と被支配的な話者がいることは確かであり、それらの存在によって、あるいはそれ以外の条件によって、さまざまな問題が生じていることは確かである。したがって、その問題を解決しようとする姿勢は重要であり、今後もその問題解決に向けての研究は推進するべきであろうと思われる。だが、それらは鈴木大拙のいう西洋的な考え方による「消極性をもった束縛または牽制から解放せられるの義」としての「フリーダムやリバティ」としての「自由」にも似ており（鈴木 1997, 64f.）、消極性をもった問題の解決としての「幸せ」であり、積極的な「幸せ」とは多少違うものであるようにも思われる。つまり、問題を解決するという意味でのウェルフェアだけではなく、幸せに資するということがどういうことであるかを問う、あるいは言葉を用いることによって幸せになることを考える積極的な「幸せ」に結びつくようなウェルフェアについて考えてみてもよいのではないかとはいえ、本稿では問題を解決することによって到達できるようなウェルフェアだけではなく、

積極的な幸せについて考えるウェルフェアをもその射程にいれられるようなリングイステイクスの可能性を示唆するにとどめざるを得ず、その具体的な理論的枠組みを提示する用意はない。これについては今後また考察を続けていくことにしたい。

5. おわりに

本稿では、Jürgen Spitzmüller の *Soziolinguistik: Eine Einführung* に記されていた批判的社会言語学を取り上げ、さらに Siegfried Jäger の批判的談話研究の特徴を明らかにし、それらと徳川宗賢が提唱した WL との接点について考察した。その接点は、どちらの学問分野も言語に関する社会的な問題を解決しようとする姿勢をとっている点にある。また、本稿では、問題を解決することによって得られるウェルフェアだけではなく、積極的な幸せに資するような言語研究の可能性についても示唆した。具体的に、どのような理論に基づき、そのような課題を考えていくかは今後の宿題である。

2021 年に行われた国際学会で発表を行った際に、「協調の原理を提唱したグライスの理論的伝統にしたがえば、コミュニケーションと協調はほぼ同じレベルにあり、コミュニケーションをすることは協調することになるため、協調的といえないコミュニケーションというものはない」という批判を受けたことがある（山下 2023, 13）。コミュニケーションが協調とほぼ同じレベルであったとしたら、戦争や紛争をすること、あるいは人と人がいがみ合うことはすべて「協調」していることになる。しかし、それらは明らかに「ウェルフェア」に資するコミュニケーションということとはできない。上で見てきたように、Jäger は「主観的な意味」を言語学で取り上げようとしなかったレオンチェフを、「フェルディナン・ド・ソシュールの伝統にしたがい、言語学の自律性を重視する姿勢を踏襲している」と批判した。これとは異なるレベルでの議論ではあるが、言語学が客観的な理論を構築するために「協調」を措定し、コミュニケーションのプラスの役割ばかりを考えることによって、現実に存在するコミュニケーション上の問題を考察しようとしなかったら、それは本末転倒であろう。現実に存在するコミュニケーション上の問題をとらえるには、コミュニケーションによって人と人が分断されたり、あるいは差別のようなことが生じる事実にも目を向けるべきなのである。

「ウェルフェア」に注目が集まり、「批判的社会言語学」に対する関心が高まっていることは喜ばしいことなのかもしれない。だが、その背後には、あるいはその理由として、2020 年ごろの新型コロナウイルスによるパンデミックによって生じた人々の分断、あるいはその後のロシアとウクライナ、パレスチナとイスラエルの戦争なども関係しているのかもしれない。二項対立的に、分断されているグループのうちのどちらが善でどちらが悪であると考えられることには与しない。しかし、最新の科学技術の結晶である AI までもがその戦争に用いられているという事実は、人間の愚かさを如実に物語っている。その愚かさを批判することなしに、積極的なウェルフェアについて考えることができないことは確かだと思う。

6. 参考文献

- 尾辻恵美・熊谷由理・佐藤慎司編著『ともに生きるために：ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育』春風社
- かどやひでのり (2023)「英語のなにが問題で、なにがなされるべきか—国際英語における言語規範の自律化と解放」『ことばと社会』25号、86-105.
- 鈴木大拙 (1997)『東洋的な見方』岩波書店
- 徳川宗賢 (1999)「対談 ウェルフェア・リングイスティクスの出発」『社会言語科学』第二巻第一号、89-100.
- 野山広・杉澤経子・吉富志津代・石崎雅人・花崎攝 (2016)「第36回研究大会ワークショップ ウェルフェア・リングイスティクスと調査研究—現場性・実践性という観点から—」『社会言語科学』第18巻第2号、82-87.
- 野呂香代子・山下仁 (2001) (編著)『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社
- 野呂香代子 (2001)「クリティカル・ディスコース・アナリシス」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社、13-49.
- ハインリッヒ、パトリック (2021)「ウェルフェア・リングイスティクスとは」尾辻恵美・熊谷由理・佐藤慎司編著『ともに生きるために：ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育』春風社、11-35.
- 平高史也 (2013)「ウェルフェア・リングイスティクスから見た言語教育」『社会言語科学』第十六巻第一号、6-21.
- 村田和代・森本郁代・野山広著 (2013)「特集「ウェルフェア・リングイスティクスにつながる実践的言語・コミュニケーション研究」『社会言語科学』第16巻第1号、1-5.
- 山下仁 (2001)「敬語研究のイデオロギー批判」野呂香代子・山下仁編著『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』三元社、51-83.
- 山下仁 (2003)「批判的社会言語学のための予備的考察」『言語文化共同研究プロジェクト2002：批判的社会言語学の諸相』(大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科編)、1-15.
- 山下仁 (2011)「批判的ディスコース分析」『日本語学』臨時増刊号 (明治書院)、152-161.
- 山下仁 (2023)「ジークフリート・イェーガーの装置分析の可能性—野呂香代子によるメルケル批判を例に—」『言語文化共同研究プロジェクト2022：批判的社会言語学の現在』(大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻編)、13-26.
- 山下仁 (2023)「書評：社会学の理論と関連付けた社会言語学の諸相— Jürgen Spitzmüller 著『Soziolinguistik: Eine Einführung.』(J.B. Metzler, 2022年)」『社会言語学』23号、175-196.
- Jäger, Siegfried (2001) *Kritische Diskursanalyse: eine Einführung*. Duisburg, Duisburger Institut für Sprach- und Sozialforschung (DISS)
- Spitzmüller, Jürgen (2022) *Soziolinguistik: Eine Einführung*. Berlin, J.B. Metzler